

信心正因

ノート

山上正尊案
20250722 勸学寮論義会

出拠	1
釈名	1
信心	1
正因	2
義相	3
一 第十八願文および成就文によつて信心正因の義意を窺う	3
二 信心の徳義について正因の義意を窺う	3
① 悲智円具の仏心 三心一心	3
② 弥勒と同体の金剛智だから成仏の因となる 便同弥勒	4
③ 自利成就 願作仏心・利他成就 度衆生心	4
④ 仏性という広大な徳を持っている 信心仏性	4
三 名号正定業 称名正定業と信心正因との関係	4
名号と称名と信心を適示しているのは	4
四 信心正因の所顕	6

出拠

『正像末和讃』（48首）（『聖典全書』2、492）

不思議の仏智を信ずるを 報土の因としたまへり

信心の正因うることは かたきがなかなをかたし

『本典』

「信文類」三一問答はじめ （『聖典全書』2、79）

涅槃ノ真因ハ唯信心ヲ以テス。

「信文類」法義釋信樂釋 （『聖典全書』2、83）

斯ノ心者ハ即如来ノ大悲心ナルガ故ニ必ズ報土ノ正定之因ト成ル。

「正信偈」天親章（『聖典全書』2、63）

正定之因唯信心

『末灯鈔』（一）（『聖典全書』2、777）

信心の定まるとき往生また定まるなり。

『口伝鈔』下（十六）信のうへの称名の事（『聖典全書』4、276）

平生に善知識のをしへをうけて信心開發するきざみ、正定聚のくらゐに住すとたのみなん機は、ふたゝび臨終の時分に往益をまつべきにあらず。そののちの稱名は、佛恩報謝の他力催促の大行たるべき條、文にありて顯然也。

『御文章』五帖十通（『聖典全書』5、184）

聖人一流の御勸化のをむきは、信心をもて本とせられ候。

釈名

■信心

信相 疑いなく本願に随順する心であり、自力心をはなれて「本願他力をたのむ」心
信体 眞実。まことのこころ。

①無疑

「信文類」三一問答 字訓釈（『聖典全書』2、80）

まことに知んぬ、疑蓋間難なきがゆゑに、これを信樂と名づく。

「同」法義釋信樂釋（『聖典全書』2、83）

次に信樂といふは、すなはちこれ如来の満足大悲円融無碍の信心海なり。このゆゑに疑蓋間難あることなし。ゆゑに信樂と名づく。

『唯信鈔文意』（『聖典全書』2、683）

信はうたがひなきこころなり

②信順

「信文類」大信釈引文（二河譬）（『聖典全書』2、77）

二尊の意おんこころに信順して

『銘文』(『聖典全書』2、655)

「言南無者」といふは、すなはち帰命と申すみことばなり、帰命はすなはち釈迦・弥陀の二尊の勅命にしたがひて召しにかなふと申すことばなり、

③たのむ

「行文類」行信利益(『聖典全書』2、49)

仰いで斯を憑むべし。

「信文類」明所被機(逆謗摂取釋)(『聖典全書』2、124)

大悲の弘誓を憑み

(信の和語)

『唯信鈔文意』(『聖典全書』2、699)

本願他力をたのみて自力をはなれたる、これを「唯信」といふ。

『正像末和讃』

(82)

仏智うたがふつみふかし

この心おもひしるならば

くゆるころをむねとして

仏智の不思議をたのむべし

④真実

「信文類」字訓釈

信樂は、すなはちこれ真実誠満の心なり

⑤まこと

『最要鈔』覚如(『聖典全書』4、343)

この信心をば、まことのころとよむうへは、凡夫の迷心にあらず、またく佛心なり。この佛心を凡夫にさづけたまふとき、信心といはるゝなり。

■正因

正直↑↓邪

正当 契当 かなう

因種

義相

■一 第十八願文および成就文によつて信心正因の義意を窺う

本願文 機受の全相 三心十念↓若不生者
成就文 機受の極要 信心 ↓即得往生

乃至Ⅱ一多包容Ⅱ称名の遍数は非因

受法 聞其名号信心歡喜乃至一念 名号を聞くⅡ信心歡喜
至心廻向 (信心も利益も賜ったもの)

得益 願生彼国 (信心歡喜の言い換え)
即得往生住不退転 現生の利益(即時に正定聚の位に即位する)

■二 信心の徳義について正因の義意を窺う

□①悲智円具の仏心 三心一む

Q 信心はなぜ正因となるのか。
A 如来の大悲心なるが故に。

「信文類」法義釋信樂釋 (『聖典全書』2、83)

当体全是

斯ノ心ハ即如来ノ大悲心ナルガ故ニ必ず報土ノ正定之因ト成ル。

衆生の心 如来四無量心(仏性)

Q 「報土ノ正定之因」とは？
A 往生の因。
Q 成仏の因ではないんですね。
A 往生即成仏。仏心を円具するが故に。
Q 仏心を円具する模様如何。
A 如来より回向された悲智円具の仏心。

至心 清浄真実・円融無碍なる 智慧心の成就相

信樂 悲智円満して決定撰取 無疑決定心の成就 名号となつて回施

欲生 大悲回向心の成就相
(諸有の群生を招喚したまふの勅命)

斯の心Ⅱ決定撰取の勅命を疑いなく聞き受けている心
すなわち 如来の無疑決定心が衆生の信樂となっている。

したがって この信樂は如来が衆生往生の因として成就した智慧と慈悲の徳が円備されている。
よく往生成仏の因種となる。

□②弥勒と同体の金剛智だから成仏の因となる 便同弥勒

□③自力成就 願作仏心・利他成就 度衆生心
如実の大菩提心

□④仏性という広大な徳を持っている 信心仏性

■三 名号正定業 称名正定業と信心正因との関係

□名号と称名と信心を適示しているのは

『論註』起観生信章 讃嘆門

曇鸞	終吉	宗祖
名号	称名	信心
智慧の相 帰命尽十方無碍光如来 破闇（無明を破る）	称彼如来名「如実」 不如実 雜行―非往生行を往生行に 正行―助業 前三後一 ―正定業 第四称名 順彼仏願故・依仏本願故	二知（実相身が智慧） 三心 二不知三不信 終 二種深信 吉 信疑決判
正定	信心	正定
仏果に向かつて不退転正定聚	往生が決定 本願の若生者に依る	現生に 成仏決定 信は仏智円備
宗祖	論註を承けて 智慧の結晶であるよう な名号	破闇（無明を破るのは智慧） 智慧の念仏 信心の智慧（如実の 称名と組み合う信心 は智慧が発っている）

Q 名号と称名と信心は別のものか。

A 名号が衆生の上で信心となり称名となるから別のことではない。

Q 違い目は？

A 名号正定業 法の側で正定聚に住する力用があることをいう。

称名正定業 終吉は機受を乃至十念の称名で語り、往生決定する行業を称名であると定めた。

宗祖は論註を承けて、智慧の結晶であるような名号の、破闇のはたらきを、
（機受の全相）智慧の念仏・信心の智慧として機受を語る。

信心正因 （機受の極要）名号領受の信心の時、仏智領受であるから仏因円満する。

Q 仏智がどうして正定聚となるのか。

A 智慧は無明の闇を破る。弥勒菩薩の元品の無明を破る智慧と同体。金剛智である。したがって成仏決定する。

「信文類」便同弥勒釋『聖典全書』一卷 103 頁

弥勒大士は等覺の金剛心を窮むるがゆゑに、竜華三会の暁、まさに無上覺位を

極むべし。

念仏の衆生は横超の金剛心を窮むるがゆゑに、臨終一念の夕べ、大般涅槃を超証す。ゆゑに便同といふなり。

正定業とは

名号	「正信偈」本願名号正定業」
称名	上述

（古来の説

Qなぜ称名が往生業（正定業）なのか

① 正選定の業

「順彼仏願故」「依仏本願故」

② 正決定の業因

勝易二徳のゆゑに

勝 名号は万徳の所帰

易 一切に通ず 平等の慈悲

一念一無上 十念十無上 行為に価値はない

信後の称名は何物か

③ 正定聚者の行業 意は

「憶念弥陀仏本願 自然即時入必定 唯能常称如来号 応報大悲弘誓恩」

念仏為本と信心正因

法然聖人の念仏為本 乃至十念を機受として語る

しかし能称の功を因としない。名号を因体とする。

ゆゑに信疑決判・信心正因と相違しない。

（「称名生因」念仏為本 行文類の立場

『銘文』末

（『聖典全書』二卷 640頁）

安養浄土の往生の正因は念仏を本とすと申す御ことなりとするべし。正因といふは、浄土に生れて仏にかならず成るたねと申すなり。

（『聖典全書』二卷 642頁）

「正定之業者即是称仏名」といふは、正定の業因はすなはちこれ仏名をとなふるなり。

正定の因といふは、かならず無上涅槃のさとりをひらくたねと申すなり。

（『聖典全書』二卷 646頁）

聖覚和尚のたまはく、「わが浄土宗は、弥陀の本願の実報土の正因として、乃至十声・一声称念すれば無上菩提にいたるとをしへたまふ、善導和尚の御をしへには、三心を具すればかならず安樂に生るとのたまへるなり」（唯信鈔・意）

(因みに) 信心正定業という説があるがこれは取らない。

『一念多念文意』(『聖典全書』二卷 671 頁)

「是名正定之業、順彼佛願故」といふは、弘誓を信ずるを、報土の業因とさだまるを、正定の業となづくといふ、佛の願にしたがふがゆへにとまふす文なり。この「弘誓を信ずる」は「一心専念弥陀名号行住座臥不問時節久近」という称名正定業という仏願の内容を信じている相である。

■四 信心正因の所顕

所顕① 称名念仏は正因ではない

所顕② 第十九願第二十願は行が必要。第十八願は唯信独達。